

連載15 「ねえ、ねえ！僕のこと好きですか？」

年度初めの4月、必ずA男さんのくっつきが始まります。支援職員の服やエプロンを引っ張って離さないのです。その多くは女性職員で、服やエプロンが破けるほど引っ張り続けるので、その行動が何を指し示すのかわからない人事異動や新入社の支援職員に至っては心を乱される大事件となってしまいます。もちろんA男さんはしゃべることかできないので、自分の気持ちを伝えるためには、実力行使しかないのですが、何回手を放してくれるように頼んでも、あるいは置かれた状況を説明しても彼の手は離れないので、他の業務ができなくなるほどで、支援職員の気持ちは焦るばかりとなります。

それでも時の流れとともに次第にくっつきの度合いは軽減していき、5月の中旬ともなれば、安心して居室で過ごす姿が多くなっていきます。この間、職員集団は次々と彼の気持ちに寄り添う支援を提供していきます。

まずは、ミニドライブと自動販売機でのジュースの購入です。もちろん支援職員と一対一の係わりです。人は誰にでも「仲良しの印」と言っている行動があります。その多くは「快」を共有するという行動になるのですが、定型発達の方々にとっては友だちになっていくときのステップみたいなもので、「一緒に居酒屋に行く」とか「一緒にカラオケに行く」といった行動がこれに当たるわけです。重度の知的障がいがある方々だって同じ人間ですから、もちろんそのような行動はあるわけです。A男さんにとっては、それがドライブと自動販売機でのジュース購入です。くっつかれる支援職員が、一人また一人とドライブに出かけるにつれ、彼のくっつきは軽減されていきます。

また、5月は彼の誕生日なので、4月からその準備が始まります。「プレゼントは何が良いかな？」「なにを食べたいかな？」「誰を招待しようかな？」、写真カードと〇×カードを駆使しながら、彼の意思の確認です。実は、誕生日というのは、無意識的には「あなたは歓迎されて生まれてきた人である」ことや「あなたのことをみんな大切に思っている」を伝える日になっていて、そのことに大きな

不安を抱えていることが多い重度の知的障がいの方々にとっては、とてもメッセージ性の高い大切なイベント日になります。

ここまで来ると、さすがにくっつきはどんどん少なくなっていきます。

そして、ご両親を若いうちに亡くしている彼には心の友ともいえる退職職員の方がいて、一年間に何回か外泊をお願いしたり面会をお願いしていたりするのですが（明星ではそのような役割を果たしている方々をふれあいパートナーと呼んでいます）、その方が5月初旬に約束通り面会に来てくださいました。

3月、4月は別れと出会いの季節です。彼は毎年この変化に心配が極限に高まります。「今までと同じようにみんな僕のことを忘れないで好きでいてくれるだろうか？」と。

ドライブ+ジュースも誕生日パーティーもふれあいパートナーの面会も、みんな彼に「好き」を伝える手段です。

服やエプロンを引っ張る彼に、私たち支援職員は、お願いや説明をしている場合ではないのです。彼の気持ちを想像力をたくましくして推測し、それを言葉にして返すことが重要なのです。そうすることで、彼は「僕の気持ちをわかってくれた」と思うのです。その手法を「感情の言語化」と言いますが、この場面でいえば、服を引っ張る彼に「A男さんのこと大好きだよ」と言葉をかけることです。そして「好き」を具体的な行動を通して彼に注ぎ込みます。こうすることで、くっつきは無くなっていきます。

保育園の送りの場面で、母親と別れるのが悲しくて泣いて母親にしがみついている赤ちゃんに、「お母さんはお仕事だからね」とか「強い子だから、もう泣かないでね」などの説明やお願いは赤ちゃんからしてみれば的外れの係わりで、「さびしいよね」「やっぱりお母さんのそばが良いものね」と声をかけることこそが、赤ちゃんの気持ちに寄り添うことになり、「わかってくれた」「好かれている」という安心を積み上げていくことになるのです。皆さん、「感情の言語化」とその行動の具現化、挑戦の価値ありですよ。